

研究所 感覚機能系障害研究部 Chu Shin Ying、森浩一、
酒井奈緒美、青木淳、越智景子、阿栄娜
学院 言語聴覚学科 坂田善政
病院 リハビリテーション部言語聴覚療法 餅田亜希子

【はじめに】吃音は、発話時に同じ音や単語の部分を繰り返す、また、話したい時に無音状態が続くなど、円滑に話せない疾患である。その原因や病態、神経基盤は十分には明らかにされていない。吃音の症状や悩みを改善する訓練方法は存在するが、それらには症状の再発や、訓練で学んだ発話スキルが日常に広がらないなどの問題がある。一方、自身（セルフ）が流暢に話している場面をビデオで見ることで吃音が改善されるという海外の報告がある。これは、模範的な行動のみになるように編集された自身のビデオを繰り返し視聴することにより行動を改善する、ビデオ・セルフモデリングという治療方法である。この新しい治療方法は、場面緘黙や自閉症での効果を実証されているが、現在のところ吃音に関しては、青年期の吃音に関する報告（Bray & Kehle, 1996）があるが、成人については十分には検証が行われていない。本研究の目的は、成人吃音者に対し VSM を実施し、その効果を評価するため、当事者自身の VSM 訓練に対する意見について検討した。

【方法】参加者は成人吃音者 10 名。手続きは下記の通りである。

1. 訓練前：参加者に対し、改訂版吃音検査法（原ら、2010）の文章音読と自由会話、独自の脚本に基づく電話を介した会話を実施しビデオに記録する。録画から、吃音症状のない部分のみを抽出・編集した 5 分程度の本人の模範（モデル）ビデオを作成する。
2. 訓練：参加者は自宅で、4 週間にわたって週に 5 回（計約 20 回）、決められた時間（毎日 5 分程度）模範ビデオを視聴する。参加者はビデオを見た後に毎回、視聴した感想をチェックリストと自由記述で記入する。
3. 訓練後：参加者自身の吃音に対する見方や考え方に変化があるかどうか調査するため、情動（感情、態度）、認知（思考、認識、理解）および自分のスピーチのコミュニケーションに関するアンケート調査を実施する。

【結果と考察】自己のビデオ聴取で疲れを感じた者はいなかったが、ストレスを感じた者が 1 名いた。発話の自然性については半数が肯定的に捉えていた。自由記述では自己の発話が自然であることに驚いたなどの感想があった。VSM 訓練後、吃音が改善できると感じた被験者は 4 名であり、そうでないという者は 3 名であった。発話に自信が持てるとした者は 4 名で、否定的な者は 2 名であった。アンケート結果から、VSM 訓練はほとんどの参加者にストレスが少なく、受容しやすい訓練だと言える。一般に吃音者は非流暢発話に意識が行き、自分の流暢性を過少評価していることが多く、VSM 訓練は後者を認識させる機会を、少なくとも半数の参加者に提供したと言える。